



楽々亭通信

第18号
令和4年2月1日号

発行：NPO法人没イチの会・京都

1月の楽々亭第16回を 開催いたしました



「親鸞は弟子一人ももたずそうろう」

『歎異抄』第六条

本願寺派布教使

安堂芳雅

親鸞聖人は九十年のご生涯を徹底して「仏弟子」の座に身を置き続けられたお方でした。

私たちは「言つてきかず」横柄な立場に身を置くことが大好きです。

なかなか、この賢い頭が下がることはありません。

先月、うる覚えのまま話した父子のエピソードですが、この昔に読んだ本をみつけることができました。

流れは同じでしたが、細かい部分が違いましたので紹介します。

少し長いですが、「ひびきまずく世界」の尊さをお味わい下さい。

福岡のあるお寺のご法座にお邪魔をさせて頂いたときのことです。

二日目の朝、お寺について客間に入りましたら、中年の男性の方が私の到着を待っていてくれたのです。

ご挨拶がすむなり、こう申されました。

「昨日の昼と夜、私ひとりのためのご法座でございました。実は、私、子供がひとりおります。大学を出て、家から通える処に就職をいたしましたのに、家に居ることを嫌って、会社のそばのアパートにひとり住んでいるのでございます。

私は中学しか出ておりませんので、子供だけはないとしても大学を出してやりたくて、苦しい家計の中からアルバイトもさせて卒業させました。

あの子が幼い時から、『お父さんはなあ、お前を大学を出す為に、靴下一つも買ったことがないんだ』とも言ったことがあります。

昨夜のご法座で、『間違っても恩を売るな！』ときつく話されましたとき、ほんとにガンツ！と頭をぶん殴られたように感じました。

考えてみますと、私はあなたの子に恩を売り続けてまいりました。

とうとう昨夜は眠れませんでした。今朝、はっきりと思いが決まりました。

今夜はご法座がありませんで、お昼がすみましたら、子供の所へ謝りに行ってこようと思えます。

こんな気持ちにならせて頂いて、ひと言、お礼を申したくて……」

うっすら涙を浮かべられての此のお言葉にすっかり感動して、

「親が子供の前に手をついたら、世間の人は笑うかもしれませんが、親鸞聖人だけは笑われはしません。行つておいでなさいませ。

九条武子さんが、
もたたり
“百人のわれにそしりの火はふるも ひとりのひとの涙にぞ足る”
と詠われたのも、こんなときのお悦びだったでしょうよ」

と語ったことであります。と語ったことではありません。

翌日の朝、本堂に出てみますと、この方の横に、その子供さんらしい若者がお座りでありました。お説教のあとお二人で

たずねてきて下さいました。

「昨日はありがとうございました。」

「昨日は六時ごろアパートへ帰りましたら、門口に父が待っていたのです。中に入れて、お茶でも出すわ」といいましたら

「いや、お茶はいい、まあ、そこへ座つてくれ」といいます……僕がもの心ついてからはじめて耳にした言葉でした。今までは、座れ！」としか言わなかった父なので、私は、座つてくれ」に驚いて父の顔を見つめたのです……」

ここまでではわりと淡々と語っていたこの青年、

「先生！」と、ひと言、叫んだかと思うと、

「先生！、親に手をつかした……馬鹿な子供で……」

「、ごさいました！」
とふかぶかと頭をさげました。
【読みやすさを考え語尾を少し変えてあります。】

自分の目で自分を見ることができないのと同じで、我が姿を見ることがとても難しいことですが、自分の本当の姿に気づかせていただく、おのずから、「頭が下がる世界」が開かれます。



松竹のプロデューサーとして

その10

「私の雑談」

長い芸能生活で種々と経験させてもらいました。辛かった友人の死、美しい女性タレントの相談事、仕事の件、男女の件、そして名付けられた私のあだ名は何でも屋の櫻井ということでした。

友人の死から気持ちが悪く、落ち着きかけたとき、またまた土地流失の件がありました。

熱海には俳優が多く住んでいたり、時に親しかった山本陽子、また大船の松竹撮影所で私の兄（監督）にシナリオを書いておられた岩崎寿賀子さん、後の橋田寿賀子のお宅があり、心配で松竹本社（20年ぶり）に電話を入れ調べてもらい、無事だった事が確認されホッとしました。橋田さんは既にお亡くなりになっておられました。

松竹本社の秘書課に電話を入れたとき、電話に出たのが秘書の女性でしたが、びっくりしたのがその女性は当時二十歳くらいで私の秘書だった女性でした。そしてこの女性は私が口説いた事があった女性でした。種々長話をして知ったことは、同僚だった役員の数人が亡くなられたという事で、生きている私が辛くなった思いを致しました。

その電話の中で小生の兄の話が出てきました。ちなみに小生の兄（次男）は松竹大船撮影所で

監督をしており、会社からヒットした歌の映画化を会社の命令で余り乗り気でないままに作らされたのが「アンコ椿は恋の花」都はるみ主演の映画でしたが、これは大入りが続く相当の数字を上げました。

それからは西郷輝彦とか歌手の映画化が続き数年撮らされていたので、それがまた大入り続きになっていました。会社は相当の利益を上げておりましたが兄としては自分の撮りたいものが出来ず、遂に松竹を辞めたいと当時役員だった父親に申し出ました所、反対されましたが、遂に松竹を辞めてしまいました。

しかし、ヒットした映画が多かったため、直ちにテレビ局からオファーがありTBSに引つ張られテレビ映画監督になりました。そして早速に監督したのが森繁さんの「おやじのヒゲ」でした。これが視聴率が良く、何年か続きました。

映画界に不況が訪れ、日活の裕次郎以外は観客の動員が少なくなり、それぞれ会社が人員整理に入りました。松竹として例外ではな

く組織の縮小、人員の整理、会社の再建を小生に命令が下りました。何ヶ月かは会社に出社せず案を練りましたが、それにして有終の美を飾りたいと思ひ提案したのが毎年1月の10日に行ってきた謝恩会を翌年1月の分を最後に盛大に開催し、のちに人員、組織の縮小をやりたいという提案をいたしました。会長も社長もOKが出ましたので委員を定めて案を練りました。

相当の大きなイベントになりそうです。
折がありましたらまた。・・・

櫻井洋三

楽々亭第17回 2月の予定

2月15日（火）

西京区役所洛西支所会議室

午前10時～12時

1月に開催した場所です。

表玄関口から入って下さい。

楽々亭通信

発行元：NPO法人 没イチの会・京都

住所：京都市西京区大原野東境谷町一丁目1番地4-701

TEL：075-874-5320 FAX：075-874-5328

MAIL：kago@botuichi.com

●楽々亭通信では、皆様の投稿を募集しております。身の回りの出来事や体験談など、何でも結構です。楽しかったこと、つらい思いをしたことなど、様々な胸の内を皆様と共有して行きたいと考えております。